

鎌倉市・若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 出土の墨書陶磁器

―「十綱」と記された白磁壺―

鈴木 弘太

はじめに

本稿では鎌倉市若宮大路周辺遺跡群で出土した、「十綱」と記された白磁壺について紹介する。本資料の出土した発掘調査については、現在、報告書作成のための整理作業中であり、本稿は速報的な資料紹介である。そのため、将来刊行される発掘調査報告書と内容に齟齬があった場合、発掘調査報告書が優先される。

さて、この陶磁器に記された「綱」の墨書は、宋人商人のサインと考えられており、日宋貿易の玄関口であった博多では、数多く出土している。鎌倉遺跡群での出土は初めてで、宋と博多の貿易の延長線上に鎌倉があった証左となりうる。

1 調査の概要と出土状況

令和4年7月から11月まで個人専用住宅の建築に伴う緊急調査として、約45 m²の発掘調査が鎌倉市教育委員会によって実施された。遺跡名は若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)、調査地点は雪ノ下一丁目218番3の一部である (図1)。

発掘調査では鎌倉時代中期から後期までの13面にも及ぶ生活面が発見された。大型の泥岩による整地層や、木組みの護岸を有する溝等が発見されているものの、調査面積が狭小であったため、建物配置などの様相は不鮮明な点が多い。ただ、箸や折敷、草履芯、漆器、貝殻、動物骨等の有機物が堆積層から多く出土しており、この調査地点を特色付ける要素かもしれない。

本調査地点の東側、雪ノ下一丁目210番他地点では、昭和63年に約1500 m²が調査され、鎌倉時代後期の下層遺構群と鎌倉時代末から南北朝時代の上層遺構群が確認されている。この調査地点では、上下層遺構群とともに扇川の旧河川が発見されており、路地や溝による区画が見出されている。区画の内容は下層遺構群では、小規模ながら掘立柱建物の主屋と附属舎の関係が指摘されており、武士の居住区と指摘されている。一方、上層遺構群では、庶民の住居と作業小屋といった区画の内容に変化が見られ、居住者の変遷が指摘されている (馬淵1990)。

さて、「十綱」の墨書が記された白磁壺は6面から7面への掘り下げ途中に出土した (図2)。鎌倉では、鎌倉時代の間 (それ以降も) 連綿として盛土による生活面の更新が行われており、その盛土を地業層とよび、それによる生活面を地業面と呼んだりもしている。つまり白磁壺片が出土したのは、第7面廃絶後、第6面を作るための盛土中ということになる。この盛土の年代は現在整理中であるものの、13世紀中頃と考えている。出土状況の詳細について、地業層の掘り下げ途中 (いわゆる粗掘り中) であったた

め未詳であるが、特定の遺構に関連付けられるものではない。

また整理作業中には、この壺底部片と同一個体と推定される磁器片が、5面から7面までの間に合計28点が出土しており、復元実測が可能となった。ただ、他の接合破片についても、近接した層位から出土しているものの、遺構に伴う出土ではなく、いわゆる客土中に含まれていたこととなる。

2 「十綱」と記された白磁壺

首部を除く、全体的なプロポーションを復元した(図3)。直接接合できたものは多くはないものの、底部から首部付近まで接合することができた(図4)。

まず、底部片から確認したい。最大の破片で底部の3/4程度が遺存する。底部厚は1.4cm、底部径は11.2cm、最大外径は12.7cmである。高台高は1.1cmで、高台の断面形は楕円がかった方形を呈し、やや外反する。外面の高台の付け根は外反するためか、内側に食い込むように、強い稜を作る。破片断面及び外底面の一部には茶色がかった黒色付着物が確認でき、漆継ぎの可能性も考えたが、他の破片にこれは見られないため、その可能性は低だろう。

体部下半には、片切彫で単弁蓮弁がめぐる。花卉の最大幅は2.1cmで、最大長は6.5cmである。一周で18枚程度が復元できそうである。そのすぐ上部には、5～7条の沈線が廻る(図5)。

体部下半は外反しながら立ち上がるが、最大径部付近からと内湾し、プロポーションとしては丸みを帯びた印象を受ける。そのため肩部に張りはなく、緩やかに首部に続く。首部下には3条程の沈線が廻る(図8)。今回、発見されていないが、この付近に耳がつき四耳壺になるかもしれない。この壺の、推定される胴部最大径は25.4cm、復元高は28.7cmである。

胎土は、白灰色から暗灰色で、白色粒をわずかに含むが、混雑物の少ない精胎。外面は白濁釉が施釉され、体部中位から肩部では細かい貫入が顕著に入る(図6)。高台部は無釉で、畳付及び高台内も無釉である。内面の下半に白濁釉が見られる、上半は薄く褐釉が施される。中位は無釉部分もある。その無釉部分や褐釉部分には煤が付着している。内面の肩部付近の一部にも白濁釉が認められるが、これは内部から釉を流し出す時に付着したものだろう。外底部に4カ所の釉ダレがあり、肩部付近の内面にも同様の釉ダレが見られる(図7)。また外面の釉葉がざらざらと荒れている部分があり、火災等で被熱した痕跡と考えられる。

当該資料は広東省潮州窯で生産された白磁の壺で、生産年代は11世紀末から12世紀前葉とみられる。

さて、墨書は外底のみに記され、それ以外の部位には見られない。外底のほぼ中央に縦に2文字「十綱」と記される。これは当時、日宋貿易に関わった宋商人のサインと考えられている。ちなみに「綱」の字の一部は先の釉ダレの一部にかかり、この部分は遺存していない。

当時、船を所有して日宋貿易に従事した宋人は「綱首」と呼ばれ、日本の玄関口であった博多を活躍の場所としていた。「綱」とは貿易貨物の輸送単位を示し、「人名」+「綱」で、その貨物の所有者や管理者を示したと考えられている(大庭2008)。

博多では「綱」が記された陶磁器が多く出土しているが、これまで「十」＋「綱」のサインは確認されていないことから、「十」が人名であるか、もしくは「十」は数の単位で「十の荷物」を示すのかは未詳である。

おわりに

簡単ではあるが、若宮大路周辺遺跡群出土の「十綱」と墨書された白磁壺を紹介してきた。

白磁壺は広東省潮州窯の製品で、11世紀末から12世紀前葉に生産されたものと推定される。また底部に記された「十綱」は日宋貿易で活躍した宋人商人「綱首」が自身の積荷と証するために記したサインと考えられる。

本資料の出土から、博多を玄関口とした日宋貿易の延長に鎌倉を位置付けることが可能ではないだろうか。また壺の生産年代が11世紀末から12世紀前葉であるのに対し、出土層位の年代は13世紀中頃である。おそらくは博多で伝世したものが、鎌倉時代になって鎌倉へ輸入されたと推定でき、これも資料の伝世や国内流通を考える上で貴重である。さらに広東省潮州窯製品が鎌倉で認識されたのも初めてではないだろうか。

このように僅か一点の資料ではあるが、鎌倉の考古学研究及び歴史研究にとって、有益な資料であることは間違いない。

付記

本稿の執筆に際しては、以下の方々から指導と協力を得た。感謝申し上げます。山口博之、石黒ひさ子、森達也、田中克子、徳留大輔、後藤健、伊丹まどか、梅岡ケイト、鈴木絵美（順不同、敬称略）。

参考文献

- 馬淵和雄 1990 「10. 若宮小路周辺遺跡群 雪ノ下一丁目 210 番他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』鎌倉市教育委員会.
- 大庭康時 2008 「墨書陶磁器」『中世都市博多を掘る』海鳥社.

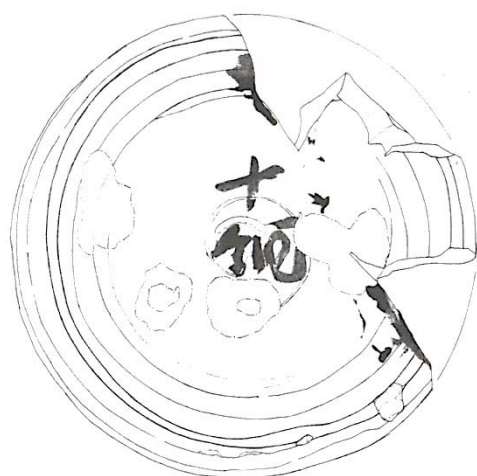
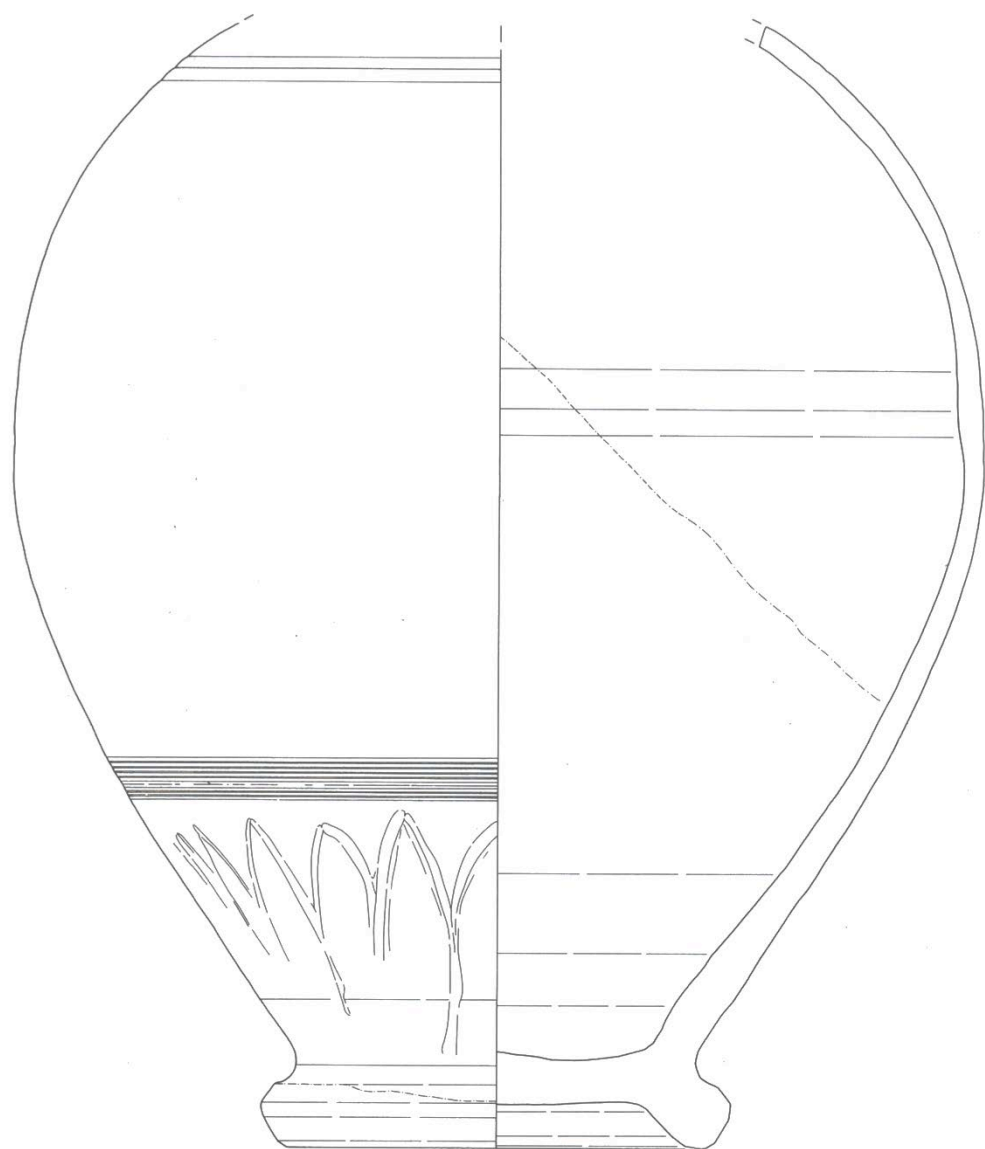
(文化財課 主事)



図1 調査地点位置図（国土地理院地図を改変）
1本調査地点、2雪ノ下一丁目210番他地点



図2 白磁壺外底部写真



0 10cm

图3 实测图



図4 接合状況 (外面)

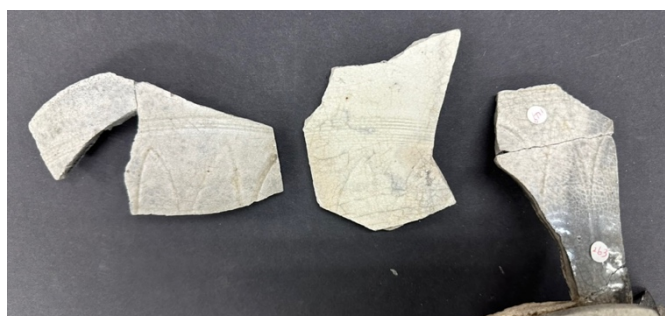


図5 体部下半破片 (外面)



図6 肩部付近破片 (外面)



図7 体部上半破片 (内面)



図8 肩部付近の沈線